



Title	発刊の辞
Author(s)	森谷, 宇一
Citation	文芸学研究. 1998, 1, p. 1-5
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/50890
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

発刊の辞

森谷宇一

「限定においてはじめて名人があきらかとなる (In der Beschränkung zeigt sich erst der Meister)」(ゲーテ) というのは、自身は古今東西を通じて随一の万能の天才ともいうべき文豪の言葉であるだけに、われわれにとってなかなか切実なひびきをもっているのではなからうか。そしてこのような専門化の立場から見れば、文芸学などというものは少なからず茫漠としていてとらえどころがないもの、いささか誇張して言えば、又工的なものとみなされなくもなからう。

そのようにみなされなくもないのはまずもって、文学についての学的研究といえば、とりわけ大学においては、いわゆる国民文学（日本文学やドイツ文学といった、言語の別にもとづいて成立する一民族の文学の全体）の別によるのが一般的であるのに対し、文芸学というものはそのような文学研究上の慣行とあまりなじまないようにみえるからである。たしかに国民文学研究は充分に有効なものであって、特に個別的ないし実証的な研究の分野において、より端的に言えばいわゆる作品研究や文学史の部門において、大きな成果をあげてきたことはいうまでもない。そしてまた、このように文学についての学的研究がとりわけ大学においては一般に国民文学の別によってなされるようになってきていることには、それなりの理由ないし必然性もある。それはとりまなおさず、文学の表現手段が言語であるということに帰着することであるが、その間のこと^{かん}をより詳しく述べれば、次のようになる。すなわち第一に文学という事象そのものが、たとえば他の諸芸術などにくらべ、それぞれの言語の別に応じて民族的な差異と統一性を充分に示している以上、文学についての学的研究は国民文学の別によ

らねばならない。第二に研究の実際上から言っても、個々の研究者は、文学作品を味解し研究しうるほどまでにいくつもの言語に通じるわけにはなかなかいかないので、どれか特定の国民文学に研究の範囲を限定せざるをえず、こうして文学についての学的研究は国民文学の別によらざるをえないということになる。

これに対し文芸学の立場からすれば、国民文学研究や、そもそも国民文学という枠組みそのものがけっして絶対的なものではないと言わなければならないまい。というのも、文学という事象は国民文学という枠組みを超えて文学であるかぎりの共通性においても成立しているというべく、しかるに国民文学研究はこのような他面へのまなざしを少なからず閉ざすきらいがあるからである。実際また、大学における文学研究者が往々にしてとらざるをえない、あえて言えば、文学へのギルド職人的なアプローチにおいてはともかく、文学についての純粹にして直接的な鑑賞（受容）体験においては、当の作品が何文学に属しているかというようなことは、どうでもいいこと、あるいは少なくとも二次的なことにすぎないはずである。それゆえ文芸学はできるかぎり、国民文学という枠組みにとらわれることなく、国民文学研究という特殊性を超えた普遍的な文学研究をめざすと、ひとまず言うことができよう。もっとも文芸学を国民文学研究ともつばら対立的にとらえるのはあきらかに誤りであって、むしろ文芸学は着実な国民文学研究の成果を大いに活用すべきであるともいうべく、そもそも両者はさまざまで明確に区別されるものでもあるまい。ただ文芸学の立場から言えば、ひとしく国民文学を対象とする場合であっても、文芸学はそれをとおしてより多く文学における超民族的なものをとらえることを主眼とし、その意味で国民文学のあいだの差異性よりもむしろ共通性に着目すると言ってよからう。

文芸学というものが少なからず茫漠としていてとらえどころがないものの、いささか誇張して言えば、又工的なものとみなされなくもないのはま

た、そもそも文芸学とはどのような学問であって、したがって通例の文学研究とどのようにちがうのか、あまりあきらかでないからである。実際、文芸学をその原語とされるドイツ語の“Literaturwissenschaft”の字義に即して言えば、「文学の学」ということになり、つまりは文学についての学的研究を包括するものということになる。

しかしもちろん文芸学は普通にはこれよりもっと狭く限定されたものと解されている。ここで文芸学をその対象、方法、課題ないし学的性格などに関して厳密に規定することは、この「発刊の辞」を超えることになる。ただ文芸学の対象ということ言えば、詳しくはつづく拙稿を参照していただければさいわいであるが、やはり特に強調しておかねばならないのは、文芸学は厳密には文学のなかでも文芸を、すなわち芸術としての文学を本来の対象とするということである。もちろん通例の文学研究においても実際にはおおむねそうになっているのだが、そこではこのあたりのことがあまり十分に自覚されていないうらみがある。また文芸学の方法ということでは、哲学的、美学的、心理学的、社会学的、歴史学的、文献学的、言語学的、記号学的などさまざまな方法がひとまずありうる。そして文芸学の課題ないし学的性格ということ言えば、文芸学とは、文芸、すなわち芸術としての文学の本質や構造を解明しようとする学問であって、そのかぎりでは広義の芸術学の一分科として位置づけられよう。したがって文芸学とは、あえてさらに踏み込んで規定すれば、作家や作品をめぐる雑多な擬似文学的事実についての安易ないし皮相な「実証的」研究の域を超脱して、本質論的ないし構造論的な概念や範疇を積極的に導入して文学の芸術性をあきらかにしようとする——そこにはたしかに、空疎ないし作為的な図式化や一般化におちいるおそれも多分にあるのだが——学問であるということになる。そしてこのことを文芸学の部門と関連づけて言えば、文芸学のそのような学的性格が最も明瞭に見てとられるのは文学（文芸）理論においてであるが、文芸学とは本来はこの部門に限定されるべきもので

はなく、いわゆる作品研究や文学（文芸）史の部門をも、それらが文芸学の上のような学的性格にかなうものであるかぎり、包含すべきものである。

さてこのたび発刊される『文芸学研究』の実質的な発行母体である大阪大学文学部文芸学研究室は、昭和51（1976）年に大阪大学文学部美学学科の一環として文芸学講座が設置されたのにはじまる。それ以来、初代の主任である当津武彦教授によって研究室が整備され、同教授自身によるアリストテレス『詩学』の研究が精力的に進められるとともに、二、三の自立した研究者が生みだされることにもなった。しかるに筆者がこの講座の責任をひきついでからは、少なからず停滞した感があり、また文学部の大講座化にともない文芸学講座という名称はなくなり、さらに大学院重点化への動きのなかで学部・大学院の再編制がいちだんと進められているが、文芸学研究室そのものはもちろん存続している。そして筆者が日頃から、文芸学を専攻する学生諸君に特に望んでいることは、1. 文学作品を体験しうる豊かな感受性と文学への幅広い関心、2. 西洋の学芸の真の伝統としての古典的・人文主義的教養、3. 言葉（母語としての日本語、外国語、そしてロゴスとしての言葉）への愛と畏敬、であって、とりわけ3.を最も重要視している次第である。いずれにせよ、文芸学研究室というような存在は全国の大学のなかでもきわめて稀少と思われるので、その独自性を少しでも発揮するようにしたいとは切に願っているところである。

そのようななかであって、本研究室を巣立って研究者としての道を歩みだした者たちや大学院生たちのあいだから、この研究室を中心とした文芸学の研究誌を発刊しようという動きが出てきた。実を言えば、本研究室の周辺にはそれぞれ文学部および旧美学科のものとしてすでに二つの研究誌があり、研究室の陣容が比較的小規模であることを思うとき、執筆者が定期的に充分確保できるかどうか危ぶまれて、あまり生産的でない筆者とし

ては消極的にならざるをえなかったが、結局は上の諸君の熱意に動かされることとなった次第である。とはいえ、当初の予定よりも大幅に遅れた刊行となつてしまい、せっかく醸金いただいた方々に御迷惑をおかけすることにもなったが、これも多分に筆者の責任である。ともあれ、新しく生まれた雑誌『文芸学研究』が、難産であった分だけ今後大きく成長することを、あるいは船出に手間取った分だけ今後の航行において安らかならんことを、切に願う次第である。